

聖イシドールス『至上の善について』

(ニュルンベルグ、1470年頃印行)

早稲田大学図書館特別資料課 雪 嶋 宏 一

中央図書館が1991年度に収蔵した貴重書の中に7世紀初頭のセビーリャ大主教聖イシドールスの『至上の善について』初版(インキュナブラ・データベース ISTC ii00192000)が含まれている。書誌学的な調査の結果、この館蔵本には注目すべき特徴が含まれていることが判明したため本稿で紹介してみたい。

聖イシドールス(Isidorus Hispalensis, ca.560-636)は北アフリカのカルタゴ出身の家系に生まれた。早くに両親を失ったため、はるか年長の兄レアンデル(聖人)と姉フロレンティーナ(処女聖人)に養育され教育を授けられた。600年頃にセビーリャ大主教であった兄の後を継いで大主教に就任し、生涯その地位にあった。その間、いくつの宗教会議を開催し、各地に学校を設立し宗教教育を広め、またユダヤ教徒を改宗させるなどしてスペインにおけるキリスト教発展に大きく貢献した。その傍ら、神学・説教・聖書解釈はもちろんのこと、歴史・文献学・文法の他、算術・地理学・天文学など広範な関心を持ち、旺盛な執筆活動を行ない、古典古代文化を中世ヨーロッパに伝える役割を果たした。主著『エティモロギアエ(起源の書)(Etymologiae)』20巻はプリニウス『自然史』の伝統を受け継ぐ一種の百科事典で、万般の事物の起源を説いたもので後世に多大な影響を与えた。死後聖人に列せられ、教会博士の尊称を与えられて広く崇敬された。

本稿で紹介する『至上の善について(De summo bono)』は3巻143章からなる中世最初の神学書である。それは、アウグスティヌスとグレゴリウス1世の影響を受けて集成された教義と勤業の手引であり、今日では

『命題論集3巻(Sententiarum libri tres)』という名で知られるイシドールスの代表作である。15世紀中だけでも単行で12版も出版され、大いに人気を博したようだ⁽¹⁾。ちなみに主著『エティモロギアエ』は15世紀中には8版を数える。しかもそのうち3版には『至上の善について』が合刻されている⁽²⁾。従って、本書は15世紀中に都合15回印行されたことになる。

図書館に架蔵された本書初版はニュルンベルクのヨハン・ゼンゼンシュミット(Johann Sensenschmidt)によって印刷されたものであるが、実のところ書物には印刷者の名前も刊行年月日も記されていない。ゼンゼンシュミットは、1461年頃バンベルクでアルブレヒト・プフィスター(Albrecht Pfister)がグーテンベルクの活字を譲り受けていわゆる36行聖書を印刷した時、グーテンベルクの弟子ハインリヒ・ケファー(Heinrich Kefer)とともにそれに参加していたといわれている⁽³⁾。その後、1469年頃までにニュルンベルクで最初の印刷所を設立し、同僚ケファーと協力して印刷を始めたようだ。ゼンゼンシュミットが最初に制作した活字は書誌学的には114Gと呼ばれる種類で、1470年から72年にかけて使用された。本書はこの活字で印刷されている。印刷年については、英国図書館所蔵本の奥書の後に「1470年キリスト昇天祭(5月31日)の直前に成る」というルブリケイターの書き込みがあり、また、バンベルクに所在するものには「復活祭(1470年の場合4月22日)の頃」という書き込みが見られる⁽⁴⁾。そのため、この版の印刷は1470年4月22日以前と推定されている。このような点

から本書がゼンゼンシュミット印刷の最初期の作品の一つであるということが判明しているのである。

所蔵本はフォリオ判、紙面寸法 300×210 mm。装丁は改められている。各巻最初のイニシャルが赤と青で彩色され細かい装飾が施されている。イニシャルを書き入れるためのスペースにはガイドレターが手書きされている。ヘッドラインと各章の初めが赤で書き入れられ、さらに、段落記号・大文字マーク・下線も赤で記されている。ウォーターマークは当時盛んに使用された牡牛の頭と王冠。第1葉表には Liber regatij Monasterij S. Petri Erforta という旧蔵者の書き込みがあり、かつてエアフルトの聖ペーター修道院で所蔵されていたことがわかる。また、表紙見返しには PRO VIRIBUS SUMMIS CONTENTENDO という蔵書票が貼付されているが所蔵者は詳らかにしない。

所蔵本にはさらに大きな特徴が見られる。それは本書が70葉からなり、折丁が[a-g¹⁰]と確認できることである。本文は65葉裏までで終わり、残り5葉は白紙である。これら70葉すべてには、各葉の表裏の印刷面を一致させるために穿たれた針孔が本の喉側の余白上下2箇所に見られる。このことはこれら70葉がすべてオリジナルの紙葉であることのなによりもの証拠である。もし、これが正しければ、最終の折丁は各シートとも片葉しか印刷されなかったことになるのである。ところが、大英博物館所蔵のインキュナブラ目録(BMC)をひもとくと葉数は66葉、巻末の白紙葉は一葉のみ、折丁は[a-f¹⁰g⁶]となっており、明らかに館蔵本と異なっている⁽⁵⁾。しかしながら、BMCには装丁の様子は記述されていない。その場合は概ね改装されたものである。また、一般にインキュナブラの場合、巻頭巻末の白紙葉は装丁の際取り除かれてしまうことが多い。それはこのような白紙葉は装丁の施される前の仮綴じの状態の時に書物を汚損から守るほどの役割をもっていたので、装丁すればそれは不要になるからであ

る。事実、現存するインキュナブラにはこのような白紙葉が残されていないことが多い。従って、調査する側も白紙葉がないからといって不完全本にすることはない。こうした点を考慮すると、本書は本来は70葉からなり、折丁は[a-g¹⁰]であり、所蔵本はオリジナルの状態をよく保存しているといえるのである。

さてそれでは、紙でさえ非常に高価であった15世紀後半において巻末に5葉もの白紙をわざわざ残すような印刷をなぜ行なったのであろうか。書物を印刷する場合、当時すでに本文の割付けの計算が行なわれていた⁽⁶⁾。そのため、最終の折丁を何葉にすると本文がうまく納まるかということは事前に判明していたと思われる。従って、その折丁の葉数を増減して紙に無駄がないように印刷することは十分可能であったはずである。事実、ゼンゼンシュミットに先立つ印刷者もそのような調整を行ない、巻末の白紙葉を1、2葉に留めている。例外としては、管見の限りケルン最初の印刷者ウルリッヒ・ツェル(Ulrich Zell)が1465年頃に印刷したキケロ『義務について(De officiis)』初版(ic 00575500)で巻末の折丁8葉のうち後半4葉が白紙葉であることが指摘できる⁽⁷⁾。しかしながら、ツェルはそれ以降こうした白紙葉本を作ってはいないようだ。その後、ゼンゼンシュミットと同時期にシュトラスブルクで印刷業を始めたと思われるC. W. というイニシャルでのみ知られる印刷者も1471年頃に印刷した『詩編(Psalterium latinum)』(ip 01038600)で巻末の12葉の折丁のうち後半5葉を白紙のままとしている⁽⁸⁾。一方、ゼンゼンシュミットは本書の他にもさらに1470年頃に刊行したベルナルドゥス・クララウェアンシス『華(Flores)』(ib 00388000)で全162葉のうち10葉の白紙葉を含めた。そのうちの4葉が巻末にある。最終の折丁は8葉、つまり折丁後半は白紙のままということになる⁽⁹⁾。さらに、1473年4月8日印刷のライネリウス・デ・ピシス『汎神論(Pantheologia)』

(ir00007000) では全865葉のうち9葉が白紙で、そのうち3葉が巻末にある。最終の折丁は10葉である⁽¹⁰⁾。しかし、これ以降ゼンゼンシュミットの作品にはこのような現象は見られなくなる。

ところが、ゼンゼンシュミットに次いで1472年までにニュルンベルクで印刷業を始めたアントン・コーベルガー (Anton Koberger) は1473年以前に印刷したウォルター・バーリー『哲学者の生と死について (De vita et moribus philosophorum)』(ib 01319000) において巻末4葉を白紙とした。最終の折丁は8葉である⁽¹¹⁾。続いて1472年11月24日印刷のアルビヌス・プラトニクス (偽アルキノオス)『プラトン教授法要略 (Disciplinarum Platonis epitome)』(ia 00352500) では僅か30葉の小冊の巻末7葉もが白紙である。最終の折丁は10葉⁽¹²⁾。さらに、1473年7月24日印刷のボエティウス『哲学の慰め (De consolatione philosophiae)』(ib00816000) では途中に連続4葉の白紙葉が含まれており極めて異例である。その箇所折丁は10葉からなる⁽¹³⁾。また、1474年8月3日印刷のライネリウス・デ・ピシス『汎神論』(ir00008000) は前述のゼンゼンシュミットの版の再版であり、初版同様に白紙葉を含んでいる⁽¹⁴⁾。しかし、1477年2月14日印刷の同書では巻末の白紙葉は1葉のみとなり、折丁が改善されているのである⁽¹⁵⁾。同年5月24日印刷の神聖ローマ皇帝カール4世の『黄金文書 (Bulla aurea)』(ic00206000) では全26葉のうち巻末3葉が白紙である。折丁は8葉⁽¹⁶⁾。これ以降コーベルガーにも同様な現象は見られない。

以上述べたようなインキュナブラにおける白紙葉の連続は一体いかなる原因で生じたのであろうか。まず最初に考えられることは、たまたま版組みと折丁の関係がうまく計算できず最終的に白紙を作ってしまったという偶然性である。次には、折丁を調整する技術が未熟なため、最終の折丁も一定の葉数で印刷したという稚拙さ。さらに、印刷原稿となった写本や稿本にそのような白紙葉が含まれて

いたためそれをそのまま再現したという必然性であろう。最後の例は前述のコーベルガーの再版書に確かに見られる。なお、館蔵本の場合にはもう一つの可能性が考えられるかもしれない。すなわち、ゼンゼンシュミットは本書に続いてその続編ともいうべきイシドールスの『独白 (Soliloquia, sive Synomina)』を印刷している (ii00204000) (1471年5月15日以前)。本来両者は連続して印刷されて一本となるはずであったが、なんらかの理由でその通りにならなかったということも考えられよう。シリーズで印刷された例としては、関西大学図書館が所蔵する1473年以前にアウクスブルクのギュンター・ツァイナー (Günther Zainer) によって制作されたアウグスティヌスやヒエロニムスの小論都合9書の合冊本は同じ版組みと判型で印刷されたことが明らかなものである⁽¹⁷⁾。しかしながら、いずれの場合にせよ、初期の活版印刷術にとってさえ巻末の白紙葉の連続は決して通常の現象ではない。

一方、このような特殊な現象は、初期の印刷者がどこでどのようにして新技術を習得していったかという未解決の問題を解く糸口を含んでいるかもしれないと考えさせてくれる。その一例として、多くの白紙葉を作ったコーベルガーであるが、今日まで彼がどこでいつ印刷術を習得したかはわかっていない。ポール・ニーダム博士は従来コーベルガー第1タイプの活字とみなされていた113Gを前述のシュトラスブルクのC. W. プリンターのものとして、コーベルガーの印刷開始を1472年頃とし、最初の活字は113Gを模倣して制作された115Gであることを論証した⁽¹⁸⁾。つまり、コーベルガーはC. W. の印刷技術を模倣したということになるだろうか。さらに、前述のようにC. W. の第4書である『詩編』にも巻末に白紙葉が見られるのである。しかし、コーベルガーが1470年頃にシュトラスブルクへ赴いたという確かな記録は残されていない。一方、同じニュルンベルクで活動したゼンゼンシュミットも同じ頃白紙葉本を

上述のように2書も刊行していた。コーベルガーは一体いずれの影響下で印刷術を学んだのであろうか。また、ゼンゼンシュミットとC. W. との間になんらかの関係があったのだろうか。両者には2孔の針孔の使用法において類似点が見られる。このような点から勢い想像力をたくましくするのは筆者ばかりではなかろう。しかし、現時点ではこれ以上の詳細は全く不明であるといわざるをえない。今後インキュナブラを調査する過程で新たな事実が判明したならばもう一度この問題に言及したいものである。

註

(1) ISTC では次の番号で登録されている。ii00192000, ii00193000, ii00194000, ii00195000, ii00196000, ii00197000, ii00198000, ii00199000, ii00200000, ii00202000, ii00202500, ii00203000.

(2) 『エティモロギアエ』は次の番号である。ii00181000, ii00182000 (慶応義塾図書館所蔵), ii00183000, ii00184000 (神奈川大学図書館所蔵), ii00185000, ii00186000, ii00187000, ii00188000. そのうち『至上の善について』を合刻しているのは ii00184000, ii00186000, ii00188000 である。神奈川大学図書館所蔵本の閲覧に際しては同館に便宜を図って頂いた。ここに記して御礼申し上げます。

(3) Geldner, Ferdinand. Die deutschen Inkunabeldrucker, Bd. 1. Stuttgart, 1968, S. 161.

(4) BMC II 404 (IB.7057).

(5) Ibid. コーピングも同様なコレクションを記述している (HC 9282* = Copinger, W.A. Supplement to Hain's Repertorium bibliographicum, pt. 2. London, 1902 (repr. 1992) p. 269).

(6) A. ウイルソン著、河合忠信等訳、『ニュルンベルク年代記の誕生』、雄松堂、1993年、p. 34-39.

(7) BMC I 179 (IA.2701).

(8) BMC II 411 (IA.7112). 本書はBMCではアントン・コーベルガー印刷とされているが、近年ポール・ニーダム博士がシュトラズブルクのC. W. による印刷であることを論証している (註18参照)。

(9) BMC II 403 (IB.7026).

(10) BMC II 405-406 (IC.7073).

(11) BMC II 411 (IB.7140). なお、コーベルガーは本書を1477年5月6日に再版しているが、そこでは最終の折丁を4葉とし巻末に白紙葉を作っていない (BMC II 414 IB.7154)。

(12) BMC II 412 (IB.7115). インキュナブラ総合目録GW806では全24葉で最終の折丁を4葉とし、最後の1葉のみを白紙葉としている。

(13) BMC II 412 (IC.7117).

(14) BMC II 412-413 (IC.7122).

(15) BMC II 413-414 (IC.7137).

(16) BMC II 414 (IB.7157).

(17) この合冊本には次の9書が含まれている。Imitatio Christi; Heironymus, De viris illustribus (imperfect); ibid. (perfect); Hieronymus, De essentia divinitatis; Augustinus, De animae quantitate; Augustinus, Soliloquia; Augustinus, Speculum peccatoris; Nider, Dispositorium moriendi; Gerson, Johannes, Donatus moralisatus. 請求番号 [C 132.298 1]

(18) Needham, Paul. Four Strasburg incunables incorrectly assigned to Anton Koberger of Nuremberg, The British Library Journal, v. 6, No. 2, Autumn 1980, p. 130-143.

付記：本書の調査にあたっては近畿大学短期大学部の河合忠信教授と中央図書館の森上修氏に大変お世話になりました。末尾ながらここに記して感謝の意を表します。